HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ボランティア活動における学生の学習過程：むくどりホーム夏プロジェクトの事例を通して
Author(s)	小山田, 奈央
Citation	社会教育研究, 21, 51-66
Issue Date	2003-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28551
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P51-66.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ボランティア活動における学生の学習過程
～むくどりホーム夏プロジェクトの事例を通して～

小山田　奈　央

Ⅰ．問　題　意　識

筆者は，対人援助職の養成のあり方に関心を寄せてきた。生活や労働，発達などの面で他者の援助を必要とする人々のニーズに応え，それらの人々が主体となるように自らの行為・行動のあり方を導き出していく対人援助職には，専門的な力量が要求される。養成機関において行われる専門教育は，この「専門的な力量」を身につけさせることを目的にしている。しかし，一方で，援助活動は要援助者のニーズに応えて，援助者の持つ専門的な知識や技術をコミュニケーション過程を通じて交換する活動である[1]と捉えることが出来る。そこには，人間関係が生じており，それによって援助活動ひとつひとつは，無二で個別なものとなる。したがって要援助－援助関係は二者関係であるということがいえるが，同時にその関係は社会構造の中に位置づけられる。特に要援助者を取り巻く環境には差別や過保護など，要援助者の主体的な生き方を阻むものがいくつも含まれている。援助者は，要援助－援助関係が絡め取られている社会構造に目をむけ，自分がその社会の構成員であることを自覚し，そこに働きかける力を獲得する必要性が出てくる。つまり，援助者が自分自身を社会の一員として理解し，位置づけ，社会と自分の相互影響関係に気付き，積極的に社会を変革していく主体となることが求められるのである。

筆者は，ここに援助者の自己教育主体形成の必要性を見出している。そして，養成機関においてどのようにこのプロセスが位置づけられ得るのか，ということに関心を持っている。これは従来から専門家養成の中で柱となる「専門的な知識や技術」の獲得と異なり，集団的な実践の中でしか発展しない特徴を持っているはずである。同時にこの課題は，養成機関＝高等教育＝青年期教育とも接点を持っている。集団的な活動の中で，青年期の課題と専門性獲得のための課題がクロスオーバーするところに筆者の関心はあるといえる。

---

[1] 二宮(2002)は，介護福祉分野を取り上げ，労働視点から見ると援助者は労働の主体であり，要援助者は客体であるが，コミュニケーションの過程が生じることにより，「主客逆転」が生じる。援助者が，自らの行動を要援助者のニーズから発生させることによって，要援助者は主体となり得ると述べている。

II. 自己教育主体形成に至るプロセスについての仮説

自己教育主体形成の過程について鈴木（2000）は以下のように提示している。

> **意識における自己疎外2の状態を脱して**
>
> (イ) まわりの世界を批判的に捉え返して問題や課題を意識し（意識化）
>
> (ロ) 自分についての理解を深め，自らの力を見直し信頼し（自己意識化）
>
> (ハ) 自分達に必要なものを現実的に，協同して創造すること（「現代の理性」形成）
>
> (ニ) 何のために何をどのように学習するのかを自らのものとしていく（自己教育主体形成）

この過程を青年期教育と援助者養成の重なりの中で考える時，配慮されなければならないのは養成段階にある学生たちが，集団離れ，生活経験の少なさ，画一的な学習形態への慣れなど，現代の青年たちの課題を抱えているという点である。それらの課題を克服するには上記のうちの［自己疎外の克服→意識化→自己意識化］の過程を積極的に保障しなければならないだろう。要援助者との関係の中で課題を見出し，自分達に必要なものを協同してつくりあげ，その関係を維持・発展させていくプロセスを援助者が自ら作り出していくためには，自分の世界を批判的に捉え，その課題を自らの意思で解決していこうとする自己内のプロセスをくぐらなければ実現しないのではないだろうか。

筆者は，今述べたような自己教育主体形成の過程へ結びつく前段階のプロセスを，援助職を目指す学生たちのボランティア実践から探っていくことを現在の課題としているが，本稿では，そのスタートラインとして学生達の内的プロセスを保障し得る実践のあり方について検討することを目的とする。今回取り上げる実践はフィールドを札幌市南区にあるむくどりホームおよびむくどり公園とし，筆者自身が企画・運営した「むくどりホーム夏プロジェクト」である。

III. むくどりホーム夏プロジェクト

1. むくどりホームについて

むくどりホームは札幌市南区藤野地区の住宅街にあるバリアフリー公園「むくどり公園」の向か

---

[2] 鈴木（2000）によると「自分たちが自分たちの世界をつくってきていて，現につくっている主体でありこれからもそうであるはずなのに，日常的にはそのことを理解することが出来ず，しばしば可視的および不可視的な他者の考え方に依存しているような状態」を「意識における自己疎外」という。

いに立っている一戸建ての住宅である。以前は，むくどり公園の発案者であり，むくどりホームの所有者である柴川氏の居宅でもあったが，現在はむくどりホームとむくどり公園を訪れる人々のためだけに使われている。むくどりホームは，公園に集まる人々がつながりを持つためのふれあいの場所であり，それぞれが障害の有無や立場をこえて対等に付き合うことを目指してつくられた場所である。

むくどりホームでは，普段の開放日を，毎週火曜日・土曜日として，遊びに来る子どもたちや母親たち，ボランティアとしてやってくる学生たちが気軽に利用できるようになっている。訪れる人々への必要な支援や情報提供などは主にむくどりホーム・ふれあいの会の代表柴川氏が行っているが，平成14年度はホームの二階に住み込みをしている女性が柴川氏の研究助手として柴川氏の活動の補助的な役割を担っている。専属の専門職がいるわけではないが，むくどりホームの運営方法として掲げられている「その日来た人がその日のボランティアさん」というフレーズからもわかるように，その日に訪れた母親たち，子どもたちの間で相互に教えあったり，分かち合ったりする風土ができていると思われる。

2．むくどりホーム夏プロジェクトの概要

むくどりホーム夏プロジェクト（以下，夏PJ）は，むくどりホーム代表柴川氏と柴川氏の研究助手である遠藤氏の協力を得て，むくどりホームの夏休み特別企画として筆者が開催した。企画・運営は筆者自身が行ったが，これまでニーズが高かったにもかかわらず，長期休暇の開放は行ってこなかったむくどりホームにとってこれがはじめての長期休暇向けの開放だったこともあり，運営費などの面で柴川氏には多大なご協力をいただいた。

筆者がむくどりホームを自らの実践と調査のためのフィールドの足がかりとして選んだ理由は，ひとつにむくどりホームには多種多様な人々が集まってくるために，人々の出会い＝価値の衝突や交流といったものが起きているという点がある。自分自身の価値観を知っていくには，他者の価値観に触れていく必要があるからである。ふたつめに，身体と頭と感情を使った「遊び」を基本とする「体験」を得られるという点が挙げられる。当然ではあるが「振り返り」は「体験」することによって導き出すことの出来る学習である。振り返ったものを素材として，自らが行った行為や使った言葉を分析し，それをもとにして次の活動の目標設定を行う「体験学習」は，自らの価値やコミュニケーションの癖などを理解していく上でも重要である。三つ目に挙げることが出来るのは，活動の対象となるのが障害の有無に関わらず「子ども」であるという点である。子

むくどりホームを実践場所として選んだ理由

① 多種多様な人々が集まる場所＝価値の交流や衝突が起きる可能性を持っている。
② 体験から学ぶ場所：「遊び」が共通体験
③ 子どもたちとの関わりを通して，援助的に接する場面が要求される。

どもと関わりを持つということは，意図的であるかどうかに関わらず，援助的に接する場面が多くなる。対等平等を意識していたとしても，子どもどうしの関わりの促進役になったり，発達的にまだ可能ではない動作の援助をしたり，精神的な不安を解消するために働きかけるなどの接し方を選択肢に持たざるを得なくなる。同時に保護者，主に母親たちとの関わりのなかで子どもたちの置かれている状況や親子関係などについても触れる機会を得ることも予想される。つまり，むくどりホームでのプロジェクトは正規の養成カリキュラムにおける実習ほど，専門領域化されたものではないが，学生たちが将来志望していている保育士・幼稚園教諭・学校教諭になるために得たいと考えている経験を提供できる可能性を持っているのである。

以上の3点が，筆者が学生たちの学習過程を理解するためにむくどりホームを選んだ理由である。

夏PJに参加するボランティア学生は，札幌市内特に南区にある高校を中心に夏PJのチラシをポスターを掲示したり，筆者の関わっている別のボランティアイベントに参加した学生達に声をかけるなどして集めることが出来た。(参加した学生たちの実態については表1を参照)将来，子どもに関わる仕事に就きたいと希望するものが多いが，ボランティア活動の経験には差があり，それは学年・学校差よりも個人差のほうが大きいように思われる。また，参加可能な日時・時間帯で気軽に参加できるよう設定したため，1回だけの者，継続する者など，参加の頻度も個人によって差があった。継続して参加する者の中には近隣に住む者，あるいは近隣の高校に通う者が数名いた。継続してきた者の中で既に筆者と親しい学生は1名のみである。

表1　参加者について

参加学生の所属	高　　校　11名（福祉専攻1名・普通科） 短　　大　6名（保育専攻） 大　　学　13名（福祉・教育・経済・法学） 大 学 院　1名（教育） 専門学校　4名（保育） 社 会 人　1名
参加のきっかけ	チラシ・ポスター，友人の誘い，DM，情報誌
参加の理由	何かしてみたかった。良い経験になると思ったから。 ボランティアに興味があったから。 子どもと遊ぶのが好きだから。 子どもと接することがなく，1日でも参加することが出来るものだったから。 夏休みを使って子どもと触れ合いたいと思った。 友人に話を聞き興味を持ったので。 実習前に子どもと関わる経験をしておきたかった。
将来希望している職業	保育士・教員・福祉関係職員 未定（まだ，分からない。今悩んでいるところ。）
現在しているその他の活動	部活・サークル・イベント実行委員・ヨサコイソーランチーム・学童保育・学校その他でのボランティア活動

むくどりホーム夏プロジェクトの実施状況，参加人数は表2，一日の流れ，遊びの内容などを表3に，筆者と柴川氏の研究助手・遠藤氏による学生たちへのサポートの内容の詳細については表4にまとめた。

表2　むくどりホーム夏プロジェクトの実施状況

プロジェクト実施期間	2002年7月29日（月）・31日（水）・8月2日（金） 8月5日（月）・7日（水）・9日（金） 9：00～15：00
参加者	

		計	子ども	大人	スタッフ
7/27	顔合わせの日				6
7/29		39	19（6）	10	10
7/31		43	21（3）	9	13
8/1	スタッフミーティング				
8/2		55	29(10)	14	12
8/5		54	27（5）	16	11
8/7	ダンボールで遊ぶ日	58	26（9）	14	18
8/8	スタッフミーティング				
8/9	チョコレートフォンデュの日	50	19（6）	13	18

参加計		64		36
平均（約）	53	23	11	13

※（　）は，障害を持つ子どもの数

表3　一日の流れ・遊びの内容

1日の流れ	9：00　ボランティアスタッフ集合 初めての人はミーティング，それ以外は昼食（オニギリづくり）や遊びの準備 開所前にスタッフ全員で顔合わせ（初参加者がいる時のみ） 10：00　開所 12：00　昼食（スタッフ・大人・子ども全員で自己紹介をしながら） 14：45～　後片付け 15：00　終了 子どもとお母さん達が帰った後でスタッフミーティング
スタッフミーティング	・7月27日（土）…顔合わせ ・8月1日（木）…子どもたちのために遊びを考える。 8日（木）…コミュニケーションについての体験学習 ・毎回子どもたちが帰ってからのミーティング…ふりかえり用紙（ふりかえり用紙B）を使い，その日にしたこと，楽しかったこと，困ったこと，他のスタッフへ伝えたいことなどを話し合う。ミーティング前後でそれぞれにアンケート（ふりかえり用紙A1・A2）を取り，ミーティングの位置付けや満足度を確認できるようにした。
その他	ボランティアスタッフ向けに，Eメールを利用した「スタッフ通信」を計10回発信。ホームページ（PC・携帯用）でも情報を提供。 経済的な負担を考え，交通費は1回参加につき500円支給。昼食はオニギリを用意した。

表4　サポートの内容と目的

場　面	内　容	目　的
活動場面で	準備や活動の内容は初日に伝えるのみ。	ボランティアどうしで教えあったり，分担したりすることをねらったため。
	子どもに関する留意点などは，危険回避のための情報のみ提供。	目の前い似る子どもから情報得てほしいという意図から。
ミーティング	［ふりかえり用紙A1･2］ 活動後とミーティング後の心境について記入してもらい回収。	サポートの関わり方，場の設定の仕方が，学生にどの様に受け取られているか，満足できるものかどうか評価するため。
	［ふりかえり用紙B］ 活動後の情報を整理し，共通事項でミーティングを進めていくガイドライン。回収しない。	一日を振り返り，自分の中に起きた感情の起伏や，疑問などを丁寧に拾い直す作業をしてほしいという意図から。
	疑問や悩みなどが出された場合は，ボランティアどうしが意見交流できるようにし，サポーターは議論に参加しない。	ひとりひとりが考える道筋を持ち，自分なりの考えや意見を自由に持つことが出来るようになるのではないか，と考えた。
スタッフ間で	学生たちが帰った後で，サポーターの学生への関わり方，問いかけなどを振り返る時間を設けた。	ここの学生との関わりを丁寧に行えるように，情報共有や気になる学生との関わり方について振り返りを行った。
聞き取り調査	筆者の行った実践の総括をするためのデータとして行った。	サポートスタッフの評価と彼らがこれから活動していくために必要なサポートの内容を探るために。しかし，聞き取り調査でよりお互いを知ることとなり，さらに関係が深まることが多くあった。
Eメール	夏PJ期間中はその日の感想などを，聞き取り調査後はその感想などを，メールでやりとりすることが多くあった。	Eメールを使用した方が，考える時間を取ることが出来，じっくり吟味したと思われる回答が返ってくる傾向にあったため。回答に時間がかかると思われる質問は敢えてメールで訊ねることもした。

3．実践の展開

むくどりホーム夏プロジェクトは，学生たちにとっては特定の地域の子どもたちと継続的に「遊び」を介して接する機会であり，子どもたちにとってはダイナミックな遊び，ことばを使った遊び，十分な接触を楽しめる遊びなど様々な遊びを，たくさんのお兄さん・お姉さんたちとの関わりのなかで味わうことのできる機会となった。学生たちは高校生から大学院生までおり，継続して来る者，一度だけ参加した者，ボランティア活動自体が初めてだった者，以前からむくどりホームにボランティアとして参加していた者などがそれぞれのやり方で子どもたちと関わり一日を過した。

学生と子ども，学生とサポーターとの相互関係を図1，図2に示した。

子どもたちは，普段の開放日では出会うことのなかったお兄さん・お姉さんがたくさんいることで，普段通りに子どもどうしで遊ぶことよりも，学生達と遊ぶことを選択する。就学前の小さな子

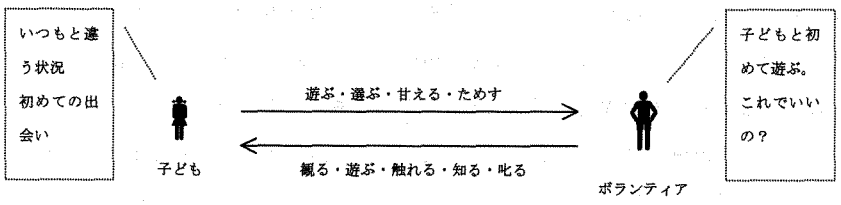

図1　夏PJにおける相互関係：子どもと学生ボランティア

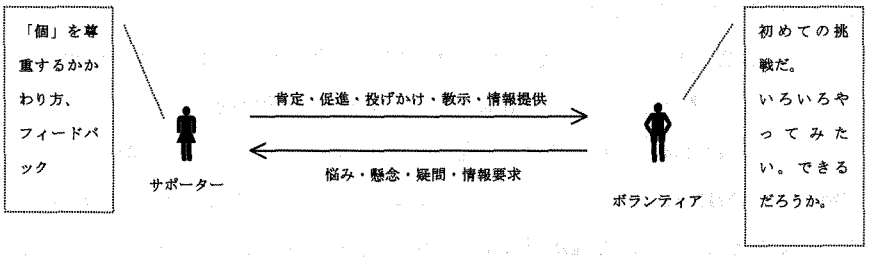

図2　夏PJにおける相互関係：サポーターと学生ボランティア

どもたちは，お兄さんよりもお姉さんを好む傾向にあり，遊びの内容もおままごとや砂遊び，水遊びなどを選んでいた。中学年以上の女の子は，お兄さん・お姉さんをからかうなど言葉を使って楽しむ傾向にあった。中学年以上の男の子は，同年代と遊ぶことを好むため，むくどり公園で仲間同士で遊ぶが，ホームの仲間で入ってくることは傷の手当ての時以外ではなかった。また，障害を持つ子どもたちは，むくどりホームに来ることが始めてだった者も多く，母親のそばを離れずに遊ぶ子どもも多く見受けられた。障害を持つ子どもの中で高学年や中学生は，会話やからだを大きく使って遊ぶ鬼ごっこやボール遊びなどを好んでいた。全体を通して，子どもたちからの働きかけによって学生達が遊びに引き込まれていく場面が多く，反対に学生から遊びを仕掛けていくことはあまり多くなかった。

子どもたちからの働きかけとはいえ，子どもとの関わりの中で学生は，自分の接し方，問題の対処の仕方がよいのかどうか，という迷いを持つ。振り返りのミーティングの際には，子ども同士のけんか，その中でも障害のある子どもとない子どもとのけんかについて，どう対応すべきなのかという意見が何度も出された。その際けんかになってしまう原因が障害を持つ子どもの障害と関係するのかパーソナリティと関係があるのか，あるいは母子関係にあるのか，など様々な意見が出され，ひとりの子どもを単に「障害児」としてみるのではなく，多面的に捉えた複合的な存在であることを理解しようとする会話になることがあった。ミーティングで複数回議論になったのは，子どもへの叱り方である。暴力的なことや不快なことをされた場合どうするのかについて，意見交換がなされた。この場合も「だめなものはだめ。はっきりと叱るべきだ」という一般的な意見で処理するの

ではなく，叱る必要があったのかどうか迷う場面に出会った学生本人がどう感じたのか，どうしたかったのかをひとつひとつ聞き取ろうとする学生がいた。同時に子どもが暴力的になったり，不快な言葉を使おうとする理由・背景を探ろうとする会話もあり，自分たちだけでは集めきれていない子どもたちの情報を遠藤氏に求める姿も見られた。もう一点，頻繁に議題に上ったのが，「呼び名」についてである。子どもが目上のボランティア学生を呼び捨てにするのは良いことなのかどうか，ということである。これについても，母親からの意見が紹介されたり，子どもたちの社会性を踏まえようとした意見，子どもとの対等平等な関係作りを目指そうとした意見など様々に出され，統一された意見は夏PJ期間内には出されなかった。

このように，学生達は子どもたちと遊ぶという経験の中で生じてくる様々な問題に出会うのだが，サポーターとしての筆者はそれに対して出来るだけ各々が各々の価値観で判断して良いということと，自分自身の価値観は常に問われており，変化し得るものであるということがらを伝えることによって判断や意見の自由度を高く持つことができるよう心がけた。また，学生が自分の不得意な側面を要求されることによって居心地が悪くなったり，劣等感を感じたりする必要がないことを伝え，むしろ自分の得意な部分や挑戦してみたいと思う部分を足がかりにまずは場を楽しんでいくことが出来るような働き掛けを目指した。このように，学生は子どもたちと遊びを介ながら様々な体験と情報を得て，それによって自らの行為や価値観の振り返りを行っていった。サポーターは，その振り返りが一般的なものになったり，暗黙のルールによって縛られたりしない，学生ひとりひとりのオリジナルなものになるよう心がけていたということができる。

さらに，このプロジェクトでは，学生・子ども・サポーター三者の相互媒介の関係があったことが見えてくる（図3）。

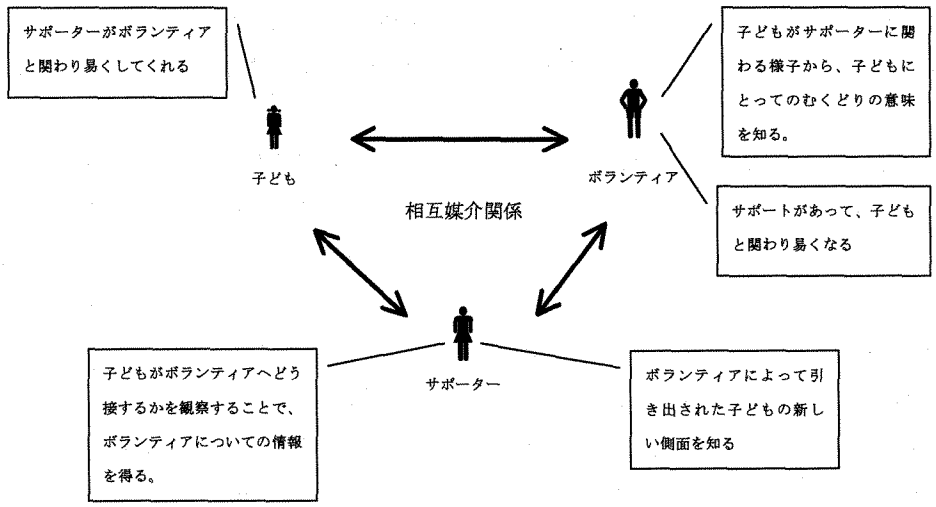

図3　プロジェクトにおける相互媒介関係

子どもと学生の関係に対してサポーターが，サポーターと学生の関係に対して子どもが，子どもとサポーターの関係に対して学生が影響を与えていたことが分かる。この相互媒介関係によって，むくどりホーム夏PJは重層的で複雑な文脈を持ち，援助する者，援助を必要とする者，という二者関係だけではなく，促進する者，問題提起する者，個人の価値観を問う事柄，おとなとして価値判断を迫る事柄などが重なり合っていたことがわかる。

4．学生ボランティアへの聞き取りと考察

では，参加した学生達にとって，夏PJはどのように受け止められたのだろうか。そのことを探るために聞き取り調査を行った。調査は夏PJに継続して参加した学生を中心に行った。調査に協力してくれたのは7名。うち，大学生が3名，高校生が4名である。将来の進路がはっきりと確定していないものの，将来的に児童福祉関係や教職を希望しているものがほとんどである。高校生のうち，3名がむくどりホームのある藤野地区もしくはとなりの石山地区に住んでいるが，大学生のうち1名は札幌市のとなり江別市から，他の2名も札幌市の中心地に近いところに住んでいるため，むくどりホームへは，地下鉄とバスを乗り継ぐか，車で通ってきていた。全体的にいえることではあるが，大学生は遠方から交通費の自己負担分が多くても積極的に参加する傾向にあり，高校生は近隣で通いやすいからという理由で参加する傾向にあった。このことから，ボランティア活動に対するニーズや関心は，大学生のほうがより高いことがいえる。これは，参加した大学生・専門学校生のほとんどがすでにボランティア活動経験があることからも考えることが出来る。一方，高校生は全員受験を控えた3年生であり，夏PJへは進路との関わりで関心を持って参加している者もいる。何か経験をして，それを進路を決める時の材料としたかったと述べる者もいた。学生達の所属や実態などは，表5に，聞き取り及びEメールで寄せられた感想は表6にまとめた。

表6－1から分かるように，夏PJに対して学生達が抱いた感想は多種多様にあるが，ひとついえることは，新しい挑戦をしてみたいと感じていることである。実際に新しいボランティア情報を求める者や新しい活動を始める者，児童福祉関係の進路を考え始める者などがいたことから，これまで経験したことのなかったことへ関心を持ち，他者の媒介なしに自分の力でやってみようという様子がうかがえる。このプロジェクトへ参加するきっかけとして，「友人の誘い」あるいは，「友人が行くから参加する」というケースはとても多い。しかし，自分に興味のあるもの・方向が見えると，友人を伴わなくとも積極的に活動できることを示唆している。

もうひとつ学生たちから挙げられているものから見えてくることで「振り返り」がある。毎回のミーティングでは，自分の活動，子どもたちの様子，活動の中で沸いた疑問などを報告し話合った。その経験からGさんのように「振り返る」ことそのものの意味を知った者もいるが，初対面の人と話すことが苦手で，普段思っていることがあってもなかなか他者と話す機会がない，大人数だと話し合えないがこのプロジェクトではリラックスした雰囲気で十分思ったことを話すことができたと

表5　聞き取り対象の学生について

5－1：大学生

Aさん　女　福祉系大学3年生	Bさん　女　福祉系大学3年生	Cさん　女　大学福祉系学科2年生
5・6日目に参加　両日とも途中で帰宅しミーティングは不参加	2.3.4.5.6日目参加 5・6日目のミーティング不参加	事前準備から手伝い 事前顔合わせ・2.3.4.5.6日目参加 1・2回目のスタッフミーティング参加
ボランティア活動経験　なし 実習経験　1週間（高齢者施設）	ボランティア活動経験　あり（障害を持つ子どもたちと遊ぶものが多い。機会があれば行くようにしている。） 実習経験　1週間	ボランティア活動経験　あり 野外活動のワーカー（1年間） ボランティアイベントスタッフ 高校時代に子どもから高齢者までさまざまなボランティア活動を経験した。特に高齢者が多かった。（部活動ではなかった。） 実習経験　なし
将来は福祉系を希望しているが，具体的に何をしたいかは未定，社会福祉士の資格を取得予定。手話をもう少し勉強したい。 参加動機は，近く初めての長期実習（療育施設）があり，ボランティア活動を経験しておきたいと思ったから。 学校で仲の良いBさんが，むくどりホームの夏PJに参加していることを知り一緒に参加した。	将来は，児童福祉分野への就職を希望している。社会福祉士を取得予定。 参加のきっかけは，DM。 ひとりでボランティアに参加するのは，今回がはじめてだったので緊張した。 遠距離ではあるが，日程的に参加しやすかった。	将来は，子どもに関わる仕事を希望。 今年になって教職を取り始めた。 参加は，筆者の勧誘。 学校では，今年になって出来た児童福祉系のサークルに入っている。

5－2：高校生

Dさん　男　高校3年生 普通科	Eさん　女　高校3年生 普通科	Fさん　女　高校3年生 普通科	Gさん　男　高校3年生 普通科
2.3.4.5.6日目参加 1.2回目のスタッフミーティング参加	3.4.5.6日目参加 スタッフミーティング2回目参加	2.3.4.5.6日目参加 スタッフミーティング1回目参加	1.2.3.5.6日目参加 スタッフミーティング1・2回目参加
ボランティア活動経験　あり 近所の学童保育 ヨサコイで障害者のサポートなど	ボランティア活動経験　なし	ボランティア経験　なし	ボランティア活動経験　あり 近所の学童保育 ホームレスの炊き出し
将来は，今は子どもに関わる仕事を希望。父親が画家なので将来美術関係に進むことも考えている。 参加は，Gさんの誘いで。 Gさんとは学校が違うが，家が向いで中学校時代から仲良し。 むくどりホームと同じ地域にすんでいる。	将来，高校国語教員になりたい。小さい子どもは，難しいから自分には出来ないと思う。でも人に教えることはとても好き。国語も好きなので。札幌市内の4年生大学に進学したい。 前からボランティアに行ってみたいなと思っていた。 学校にポスターが貼ってあって，友人のFさんと誘い合って一緒に行くことにした。	保育の短大に進学したい。 学校にポスターが貼ってあって，気になっていたらEさんもチラシを持っていて一緒に行こうということになった。	むくどりホームと同じ地域に住んでいる。 高校の部活動を辞めてから，いろいろな活動を始めるようになった。 福祉の大学に進学したい。 道内にするか道外にするかで迷っているが，将来は福祉の現場で働きたい。

表6　聞き取りなどの結果　○はききとり。●はEメール

6－1：［むくどりホーム夏PJに参加してどうだったか］

A	○子どもは好きなんだけど，苦手。猫アレルギーの人が，猫嫌いみたいな感じ。昔は，子どもと関わることが出来たはずなのだが，今はどう接したらいいのか，何を話したらいいのか分からない。でも，感覚を取り戻す，慣れていくしかない。 ○むくどり夏PJに参加して，はじめの1歩になった。子どもと関わる自分なりの方法を徐々に見つけて慣れていきたい。 ○むくどり夏PJに参加してから，ボランティアをやってみようと思って，情報誌を見たりした。でも，今は実習を精一杯やりたい。
B	●「ひとりでボランティアに参加するのは初めてなので，不安」 ●むくどり夏PJが終わってから，障害をもつ人たちへの偏見が以前に増して許せなくなった。この間も，バイト仲間に「ボランティアよくやるね」「あの人たちは頭がオカシイ」と言われて，その場で熱く語り，訂正するように話した。 ○むくどりは，雰囲気が良くて，マメちゃん（専従スタッフ）もいるから行きやすい。 ○小人数で顔が見えるから，いろいろなことが話しあえる。
C	●こういった場所があるんだぁ…きっとここで育った子どもたちは大きくなってからむくどりという場所がそれぞれの形で残っていくんだろうなぁ。地域の人みんなで子ども達をみていくっていいなぁ。子どもにとってあの環境はまさに子ども同士の『きょういく〔共育〕』なんじゃないかな？って感じました。 こんなふうに地域の中で育つ子どもたちについて考えました。またそれを通しての，地域そのものの繋がりみたいなものを感じ，考えました。 ○むくどりホームは，話で聞いただけでは良く分からなくて，行ってみてすごくショックだった。こう言う場所があるんだ。不思議な場所。 ○これまでのむくどりホームのやり方が子どもたちや参加者の中にあるから，それを見つけてあわせていく感じだった。 ○むくどりを成り立たせる土台になる部分があって，それがすごくしっかりしていると思った。
D	●（夏PJに参加して）急激に変わったとは思わないけど，視野が広がったかなとは思う。いろんなことに興味持ったりするようになったし，親ともよく話するようになった。あと，優しくなれたんじゃないかな，なんつって。 ○児童福祉の専門的なことをもう少し勉強してみたいと思っている。
E	●私が夏プロジェクトに参加して，人間と接する中での様々な事を学びました。これは，相手が子供だけじゃなく大人の場合でもそうです。また，今まで深く考えていなかった「福祉」というものにも興味を持ち始めた事も事実です。今後もたくさん得たモノを大切に私自身も成長していきたいです。 ○（自閉症を持つ子どもと関わった経験から）自閉症についてもっと知りたいと思った。
F	●「（むくどり夏PJに参加して）自信が持てた！夏プロに参加する前までは結構家に引きこもってたけど，また色々やりたいことを見つけて外に出るようになりました☆●私実は夏プロに参加する前に腰を悪くしてて体を動かすと腰痛いし情緒不安定で何をするのもイヤになってたんです★そんな時むくどりのコトを知って，何か変わるかもしれない！って思って参加しました。最初は腰に負担もあったんだけど体を動かしてるうちに何故か腰が良くなってきた感じがして，また歩いて遊びに出かけたりするようになれたんです◎だから新しいコトとは違うかな?? でもむくどりには感謝デスよ♪
G	●人との接し方みたいなのが微妙に変わったらしいです。夏休み終わってから「なんか優しくなったんでない？」って何回か言われたことがあるんですよ。自分ではあんまり変わってないと思うんだけど…。あと，それまではやったらやりっぱなしって感じだったけど，何かしたあとに反省点とか良かった点を振り返ってみようと思うようになりました。振り返ることで次につながると思ったんで。実際，ニセコのやつ（筆者が紹介した別のボランティア活動）でもうまく行ったと思うし。むくどりでの（自分）のことを反省したからだと思います。

6－2：［子どもとのかかわりのなかで］

A	保育の勉強をしている人たちが，子どもたちと屈託なく遊んでいる様子が，すごいと思った。彼らから勉強したい。むくどりでは，どう関わったらいいのかを考える間もなく，子どもたちが次々やってきた。逆に自由にやっている子どもたちが羨ましく感じた。むくどりホームは不思議な場所。施設だと，行きたくなくても住んでいるから，そこにいなくちゃ行けない。むくどりでは自由。
C	○子どもは，障害あるなしに関わらず，自分にとってはみんな子ども。 ●2日は天気もよく，外で遊ぶ事が出来てよかった！毎回，子どもに関わって，みんなの話を聞いて，色んな事を考えさせられます。今日だと怒りかたの話ですね。やっぱりそれぞれ違っていて独自の方法があったりして，その人に合ったやりかたが必要なんだな…と改めて感じました。そして子どもによっても微妙に変えていかなければならないなぁ…と。…はい。毎日色んな気づきがあって考えて，でもやっぱり自分が楽しいと思える事じゃないと出来ないから楽しんで，いい時間を過ごしてます。昨日は砂場に魅せられてしまいました。お恥ずかしい…
D	○自分は，子どもに対してずぼら過ぎるかな，と思った。子どもとの関わりの中で，嫌だと思うことがあまりなかったが，周りの人はこまめに子どもに対して思うことがあったから。 ○ボランティアスタッフを子どもたちが呼び捨てにする問題が，自分の中ではどうしたらいいのかわからないまま。自分は，呼び捨てでもいいと思うから。
F	○いつもむくどりに来ているボランティアの短大生がすごいと思った。子どもと余裕を持って遊んである様子がすごい。

6－3：［自分について］

A	○楽天的に考えることの出来る時もあるが，不安な時は深く考え込んでしまって，どうしたらいいのか分からなくなる。 ○人と会うのは好き。でもなぜ福祉をえらんだのか自分でもよく分からないから，自分で自分のことをすごく知りたい。 ○いろんなことをやってみたいが，どうやったらできるのか，受け皿がどこにあるのか分からない。
B	●自分は，ウサギだと思う。臆病だという点と，淋しいと沈んじゃうという点で。周りを気にしすぎてしまう。 ○中学校くらいから，福祉に進むことは決めていた。親は，障害を持つ人に対して強い偏見のある人たちなので，全然理解してもらえない。
C	●（自分を例えるなら）うーん…なんだろう？『ハードルの選手』とかかなぁ？おもいっきり走って跳んで…もちろん越える（超える）ための努力もする！でも，あまりにも高すぎて，がんばってもがんばってもどーしても無理ならくぐっちゃえ！くらいのよゆうがあってもいーんじゃない？って人。いっぱいになって何もみえなくなるって事があったので，最近はこのスタンスで生活してます。
D	●今の自分を例えるならパパ。子どもが好きで，気になって仕方ない自分に気がついた。 ○親からの影響は大きいと思う。父親が画家なので，小さいころから大人と，特に普通じゃない大人と話す機会が多かった。自分がやりたいことを見つけるまでは，時間をかけるものだと思っている。 ○学校の仲間と比べると，楽観的すぎるとも思う。Gは慎重だけれど，自分はその時その時に決めてしまうところがある。学校には，腹を割って話せる友達はいない。でも，他の人よりは楽に生きているとは思う。自分の将来について自信があるわけではないけれど，あまり心配していない。時間をかけて見つけていくものだと思う。 ○母親も，自分の父親と長く一緒にいるという点でとても強い人。いろいろなことが話せる相手。 ○小さいころからの仲良しが，親友。いつも一緒にいる。遊んでいるというより，たむろっている。いろんなことをしゃべる。
E	○音楽に進みたかった。でも，教えることが好きだったから，先生になろうとおもった。分からないことでも，人に聞かれたら絶対自分で調べて教える。 ○子どもとの遊びは，体力の使うものはつらい。おにごっこやボール遊びなど。 ○予測のたたないことは苦手。できれば予定をたてたい。自閉症の女の子と関わったが，何をしたいのかがよく分からなくものすごく困った。疲れた。最後は，子どもに連れて歩かれるままだった。
F	●（自分を例えるなら）健康大好き姫♪3食バランスよく食べ毎日歩くようにしましょう(^^)　私ご飯よりお菓子ばっかり食べてたんだけどオニギリのおいしさを知って家でもちゃんと食べるようになりました♪ ○短大の面接の時に，むくどり夏PJのことを話すことが出来た。 ○かなり人見知りをする。でも，そのかわりいろいろな人を観察すると思う。
G	●むくどりでの僕は，小さい頃に遊んでくれた近所のお兄ちゃんみたいなものだと思うんですけど。あの頃のお兄ちゃんってこんな感じだったかなって思うんで。でも今の自分となると，勉強とボランティアとかやりたいことやって忙しい毎日を送ってるんで働き者の蟻にでもしておこうかな（笑）。 ○今は，受験をどうするか決めなくちゃ行けない。

いうBさんのような人もいた。毎回の経験自体は個別のものであるが，何を感じたか，どんなことがあったか，それをメンバー同士で共有することが出来るようになると「仲間」という意識が生まれ，居心地のよさにつながっているようである。

聞き取りの対象になった学生ではないが，ある学生は子どもたちと遊びっぱなしで，反省会やミーティングのないボランティア活動を経験から，それを「もったいないこと」と表現していたが，子どもと遊ぶことを目的にしていたとしても，同じ時間と空間を共有して活動するほかのボランティアメンバーと会話する環境にない場合は物足りなく感じるのであろう。

さらに，メンバーと会話の出来る環境にあることは，自分の子どもとの関わり方を考えさせる機会にもなるようである。多くの学生が，他のメンバーがどのようにして子どもと関わっているのかをよく見ているし，気にしている。しかし，他者の行動と自分の行動を見比べて優劣をつけるというよりは，メンバーの数だけ，色々な考え方や接し方があるということを感じながら，自分なりの方法や考え方を見つけたいと考えている者が多いということも分かる。今すぐ解決しようとせず，他者に答えを求めようとしないところからもそう見ることが出来るだろう。もちろん，より積極的に自分の疑問と感じたことを議題として取り上げることをメンバーに要求することも可能である。しかし，今回の学生たちのなかにそのような者がいなかったことから，筆者は敢えてそれらの議題をさらに追求するようにミーティングを進めなかった。学生ひとりひとりの中に生じる疑問や感情の起伏を充分に味わい，他者の意見に耳を傾けて，ひとりひとりの中に新しい言葉が生まれてくるまで，サポーターのペースでリードしていく必要はないと判断したからである。

プロジェクトの間，筆者はサポーターして学生たちと関わりながら，彼らがどのようなニーズを持っているのか，どのような環境であれば，リラックスした状態で他者からの圧迫などを感じずに，自分の感情と感覚を総動員して子どもたちと遊ぶことが出来るのかを考えていた。当然であるが，学生ひとりひとりはパーソナリティーを持ち，歴史を持っている。それぞれに家族がいて，学校生活もある。そのことは，子どもとの関わり，他のメンバーとの関わり，サポーターとの関わり，振り返りの仕方など，様々な面に現れてくる。筆者はそれらもまた，彼らを理解していく上で重要な情報であると考えている。そのような情報の中で最も重要だと考えていたのが，学生ひとりひとりが自分に対して持っている自己像である。

聞き取りに協力してくれた学生のうち，CさんやGさんは，活動している様子や筆者との会話の中で，自分自身を変化するものであると捉えている印象があった。子どもたちとの関わりの中でも，迷う場面に何度も遭遇しながらも，その時その時の子どもとの関わりや他のメンバーとの関わりを楽しみ，積極的に何かを得ようとしているのである。Bさんが自分自身を「うさぎ」＝臆病だと表現しているように，AさんやBさんは，初めての場所や初対面の相手にはとても消極的に関わってしまう傾向があることが活動の様子から察せられた。しかし，AさんもBさんも自分自身が成長する機会を求めているという点では，CさんやGさんと変わりない印象を受けていたため，彼らに対し

ては居心地のよさや発言のしやすい環境を提供することが，まず重要であると筆者は考えた。

しかし，関わっていく中で，自分で自分自身を固定している印象を受ける者がいた。そのような学生は，自己イメージの中にないことに挑戦するのを嫌がったり，不安がったりする傾向にあった。それは，子どもとの遊びの中からも見られることが多く，体を使う遊び，ごっこ遊びなど，子どもに誘われて参加するものの長く続かず，あまりのびのびと楽しんで遊んでいる様子には見えなかった。また，ミーティングの際も，他のメンバーが真剣に一つの議題で話をしようとしているにもかかわらず，全く関係のない話題を持ち出し，話をそらすなどの行動が見られた。そのような様子や行動がどの程度，学生自身の持っている自己イメージと繋がりを持っているのかは，プロジェクトの短い期間では窺い知れなかったが，極端に変化を嫌がっている様子が見られたことから，そのような学生に対しては他の接点の持ち方が必要なのではないか，と考えている。

5．むくどりホーム夏プロジェクトのまとめ

むくどりホーム夏プロジェクトは，援助職，特に子どもに関わる仕事を目指す学生達の自己内プロセスを検討する目的でセッティングした。当初から，学生達には主催者である筆者の意図は明確には伝えられていた訳ではないが，夏PJ自体は，様々な学生や子ども達が化学反応を起こすための装置であったといえる。その装置の役割は以下の三つにまとめることができる。

夏PJの役割
- 自由に自分を試す場所
- 体験の学習化
- 学習の体験化

ひとつは，自由に自分を試す場所となったということである。初めて出会う子どもたちとの関わりの中では自信のないこと，挑戦してみたいことなどに取り組まざるを得ない機会が増える。新しいこと，未経験の事柄に取り組むことによって自分について考えるための材料が増えたことが予想される。ふたつめは体験の学習化である。これは，ミーティングという振り返りのための時間を取ったことにも関わっている。自分がその日とった行為・発した言葉が子どもにとって，自分にとってどのような意味を持っていたのかを振り返り，他者と共有し，次回の目標を立てる学習のプロセスを生み出している。また，子どもとの関わりの中で体験した行き違いや思い違いなどが，子どもの持つ障害や家庭環境の説明を受けることによって，明確になるというような，経験・体験と知識との結びつきも生まれている。三つ目は，学習の体験化である。むくどりホームでの実践は学生達に「地域」の意味と役割を見せている。一つの地域に住む子どもたちと継続して関わることは，学校やニュースで耳にする「地域福祉」「地域の教育力」といった言葉を，観念としてでなく，実態として理解する機会になる。

以上のように，むくどりホームでの実践は学生達が学習＝新たなものを知るという側面を大きく刺激しているということがいえるのではないだろうか。それを可能としたのは，むくどりホームの持つ「バリアフリー」という大きな枠組みであったと考えられる。すべての人がそれぞれに認めら

れる空間が既に保障されていることが，学生ひとりひとりが自由に行動し，それぞれの文脈で他者と関わることにつながったと考えられる。同様に筆者およびむくどりホームの遠藤氏が学生のサポーターとして，心理的な自由を保障する働きかけを行うことを意識した点にも，意義があったと考えられる。

IV. 今後の課題

当然ではあるが，ボランティアとして要求されることがらと，高校生や大学生の年齢の若者が出来ることがらとが一致していることはあまり多くない。「出来て当然」「出来るのが常識」といった実践者側の視点を捨て，彼らの現状で何ができるのか，どのような環境が整っていると，更に伸びようとするのかというポイントを探ることが重要になると感じている。今回の実践を通して，学生達は安心して自己表現できる環境があって始めて，新しい課題や挑戦に取り組んでいけるということが見えてきた。同時に，彼らがどのように見えているのかを時として的確にフィードバックしなければ，自己を客観的に見ることが出来ないということも理解された。今回の実践では，学生たちが自由に心とからだを動かすことの出来る実践装置の役割とあり方を検討するのに留まったが，参加した学生達には，他者との接点を増やすことや新しい経験をすることが，自分を考えるための材料を増やしていくということを経験するきっかけになったように思われる。

今後は，今回の実践で得た結果をもとに，さらに実践を重ねていく予定でいる。特に，他者との関わりの中で自分の価値観やコミュニケーションのくせなどを理解するプロセスや他者との協同の重要性を理解し，実現させようとする道筋がどのようにして学生たちによって引かれていくのか，丁寧に調査していきたいと考えている。

【参考文献】

「日本経済の危機と新福祉国家への道」二宮厚美　新日本出版社（2002）
「現場の力」尾崎新編　誠信書房（2002）
「学ぶ力をうばう教育」武田忠　新曜社（1998）
「学生が輝くとき」清水真砂子　岩波書店（1999）
「子ども・若者の居場所の構想」田中治彦編著　学陽書房（2001）
「開かれた学校と学習の体験化」栗原敦雄・柴沼晶子・永井聖二編著　教育開発研究所（1992）
「「地域をつくる学び」への道」鈴木敏正　北樹出版（2000）
「地域住民とともに」大前哲彦・千葉悦子・鈴木敏正編著　北樹出版（1998）
「自己教育の論理」鈴木敏正　筑波書房（1992）
「主体形成の教育学」鈴木敏正　御茶の水書房（2000）
「人間関係」第2・3号合併号　南山短期大学人間関係研究センター（1985）
「人間関係」第9号　南山短期大学人間関係研究センター（1991）

「人間関係」第10号　南山短期大学人間関係研究センター（1992）
「人間関係」第14号　南山短期大学人間関係研究センター（1996）
「人間関係トレーニング：私を育てる教育への人間学的アプローチ」津村俊充・山口真人編　ナカニシヤ出版（1992）
「ボランティア学習の概念と学習過程」長沼豊　日本図書刊行会（1998）
「心のバリアフリーをめざして」藤野むくどり公園開園5周年記念誌　かりん舎（2001）
「子ども・若者と社会教育」日本社会教育学会編　東洋館出版社（2002）